

図書紹介

谷川彰英 著

『地名に隠された「東京津波」』

伊藤純郎*

本書は、「筑波大学定年退職と同時にノンフィクション作家に転身し、第二の人生」(奥付)を歩まれている筑波大学名誉教授谷川彰英氏が執筆された「学問の壁を超えた自由な発想」による地名論である。

周知のように、洪水・山崩れ・山津波・鉄砲水、津波、地震など災害が多発する日本列島には、災害の歴史を物語り、災害の危険性を予知する地名が多い。

谷川氏と私の「ふるさと」である長野県では、県歌「信濃の国」のなかで「聳ゆる山はいや高く、流るる川はいや遠し」と歌われているように、北・南・中央アルプスに源流をもつ山川が犀川・千曲川・木曾川・天竜川などの大河に流れこみ、洪水・山崩れ・山津波・鉄砲水などの自然災害が頻発する。このため長野県には、こうした自然災害の記憶を刻み込んだと思われる「蛇崩れ」「蛇抜け」「蛇退」「蛇谷」という地名が多い。これは、文字通り、川沼・山谷の主である「蛇の祟り」によって、洪水・山崩れ・山津波・鉄砲水が起これると考えられたことによる。

本書は、こうした地名に込められた警鐘に真摯に耳を傾けることの重要性を、平易に説いた本である。

谷川氏は、すでに数多くの地名論を執筆されており、東京地名論に関しても、『東京・江戸 地名の由来を歩く』(ベスト新書, 2003年), 『東京「駅名」の謎』(祥伝社黄金文庫, 2011年)がある。本書とこれらの東京地名論の違いは、執筆された動機と想い、そして問題意識にある。

「まえがき」によると、本書は、「もともと東京の地名に関する本を、といった程度から始まった企画だったが、途中で3・11を体験し、なんとかしてこの体験

*筑波大学人文社会系

を活かした本をつくりたいという切実な思いに切り替えて書き下ろした」ものであるという。「石ノ森萬画館」実現のため石巻に数年間通い続け、石巻を「第二のふるさと」と思う谷川氏にとって、東日本大震災は、テレビ映像を通じてその惨事を悼むような他人事ではなく、まさに自分自身の問題であった。東日本大震災から八か月後、本書を脱稿した後に石巻や地名の取材で以前訪れた女川に足を運んだ谷川氏は、「想像以上の光景」に「ただただ唇をかみしめるだけ」で、「このような悲劇を東京で起こしてはならないと思って本書を書いた。そのことを改めて痛感した」と「あとがき」に記している。

本書は、東日本大震災を体験し、「この東京はとてつもなく危険な都市であることに気づいた」谷川氏が、「今の東京に10メートルの巨大津波がやってきたら」という前提で執筆したものという。

これまで東京都は、地震災害による危険地帯を、地震によって建物がどれだけ倒壊するかという「建物倒壊危険度」と、地震によってどれだけ火災が引き起こされるかという「火災危険度」の二つの尺度で認定し、危険地帯を最も危険な地帯である5から安全地帯である1までの5段階で評価し、都内の区市町村ごとに公表してきた。この一覧表を見た谷川氏は、「江東区から墨田区・江戸川区・葛飾区の広範囲に広がるいわゆる海拔ゼロメートル地帯の多くが危険地帯に入っていないこと」に愕然とし、「建物倒壊危険度」と「火災危険度」という二つの尺度でのみ危険地帯を認定する方法に違和感をもったという。

関東大震災の翌々年にあたる大正14(1925)年に刊行された「東京市高低図」を偶然目にした谷川氏は、「今の東京人には土地の高い・低いという感覚が消えてしまっているように見えてならない」ことを痛感し、今の東京人が失っている「東京の土地の高低感」を体感することが、「高き」から「低き」に流れる津波の単純な原理を理解することに繋がり、「建物倒壊危険度」と「火災危険度」という二つの尺度から抜け落ちた「津波危険度」の対応策ともなると考えたという。

以上のような動機と想い、問題意識のもとに執筆された本書は、以下の七章から構成される。

- 第1章 東京湾を巨大津波が襲ったらー
- 第2章 土地の高低感を忘れた東京人
- 第3章 東京の低地地名からのメッセージ
- 第4章 東京都心部の危険地名からのメッセージ

第5章 東京の谷底地名からのメッセージ

第6章 安全な町はどこだ？

第7章 東京は生き残れるか

「東京湾を巨大津波が襲ったら」「危険地名」「谷底地名」「安全な町はどこだ」「東京は生き残れるか」など、刺激的な章のタイトルが並んでいる。また、本書の帯にも「大津波が襲う時水没するのは東京のどこだ」「東京水没危険地名」と書かれている。

本書を店頭で手にされた方々は、こうした章のタイトルや帯の文章に興味を抱き、自身の居住地域に関する「低地地名」「危険地名」「谷底地名」や居住地域が「安全な町」であるかどうかを確認するため、本書を購入されたことと思われる。このことは、このたびの図書紹介にあたり本機関誌編集委員会から拝領したものが2012年4月4日発行の「第6刷」本であったことからもうかがえる。

谷川氏のシミュレーションによると、「海拔10メートルまで浸水したら?」、「下町から都心部一帯はもとより、谷根千寄りには千駄木あたりまで、神田川沿いでは早稲田、高田馬場あたりまで、さらに外堀沿いでは市ヶ谷あたり、古川沿いでは恵比寿近くまで、目黒川沿いでは中目黒あたりまで海に沈んでしまうことになる」(第1章29頁)とのこと。

また、「最大で10メートルの津波が東京を襲った場合」、①東京湾に入った津波は千葉県富津市・君津市の平野部を襲い、千葉市から浦安市に至る埋立地におつかる、②東京湾方面の津波は、荒川から江戸川方面と、お台場海浜公園を越えて隅田川という二つの方面に流れ込み、築地・新橋・銀座・日本橋方面は浸水し、浅草・本所・深川・亀戸は水没する可能性が高い、③上野は不忍池あたり、神田川沿いは後楽園あたり、古川沿いでは麻生十番近く、日本橋沿いでは品川から五反田あたりまでがかなり危険であるとのことである(第1章30~32頁)。

こうしたシミュレーションのもと、「土地の高低感を忘れた東京人」(第2章)に対し、江東区-砂町・亀戸・大島・深川、墨田区-押上・曳舟・向島、江戸川区-宇喜田・一之江・小松川、葛飾区-柴又・亀有などの「低地地名」(第3章)、浅草・吉原・日本堤、築地・佃島・入船、日比谷・有楽町、新橋・汐留、赤坂・溜池、小石川後楽園・飯田橋・市ヶ谷などを事例に「川や水にちなんだ」「危険地名」(第4章)、神田川・小石川・江戸川をはじめとする河川に沿った「谷底地名」

(第5章)からのメッセージが、「東京市高低図」とともに、それぞれ具体的に語られる。

また、津波や浸水の危険や不安と「無関係で安全とされる地域」として、春日通り・中山道・甲州街道・青山通り沿いの地名や、高台につくられた池袋・六本木などが紹介される。そして、「自分の住んでいる町が安全か否か」に関しては、「坂道」に着目し「坂の下が海拔何メートルかを確認すること」が強調される。すなわち、「坂の下が海拔10メートル以上あれば、まったく問題はない。しかし、5メートルくらいだと浸水する可能性がある。2～3メートルだったら、覚悟する必要がある」(第6章169頁)。

終章に当たる第7章は、津波対策として「ビルとの連携」や「スーパー堤防」などが指摘されたのち、「津波から逃れるためには、あなた自身が立っているその土地が標高何メートルあるのかを常に意識することである。地震がいつ起こるかを予知することではなく、いつ来ても構わないようにまず足元を見つめることがあなた自身の命を救うことになる」(183頁)という文章で結ばれる。以上が本書の概要である。

柳田国男は、名著『地名の研究』(1936年)のなかで、「自然に発生した地名は始めから社会の暗黙の議決を経ている。従ってよほど適切に他と区別し得るだけの、特徴が捉えられているはずである」と述べ、地名研究の重要性を説いた。

本書は、東京の地名が物語る巨大津波の危険性を丹念に分析する作業を通じて、柳田が重視した地名研究を実践したものである。それだけに、本書の行間から、地名にあつい“まなざし”を注ぐ柳田と重なる谷川氏の姿がうかがえた。

今後、谷川氏は地名研究の第一人者であった故谷川健一氏のお仕事を引き継いでいかれるとのこと。ますますのご活躍を祈念する次第である。

谷川彰英著『地名に隠された「東京津波」』

講談社+α新書、2012年1月、838円(税別)